

# 「ディスコ」に行こう！

写真・文  
菅原 純  
Jun Sugawara



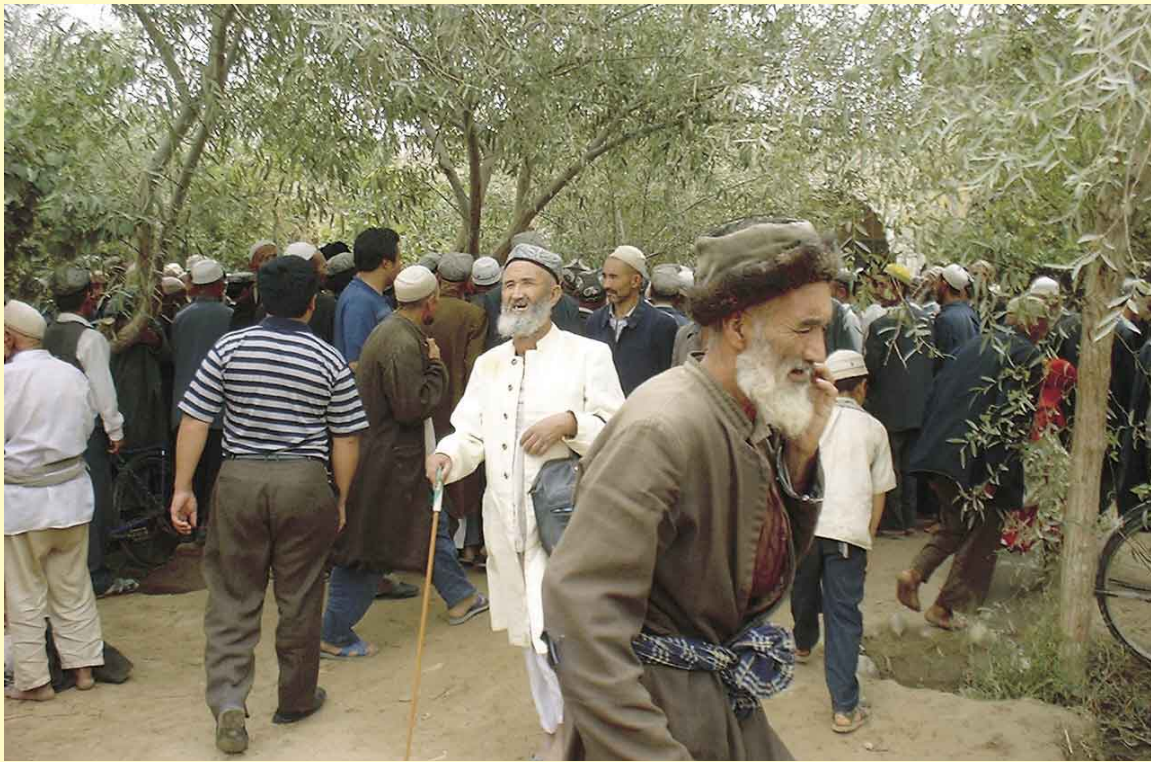
「ディスコ」たけなわ。旋舞する信徒たち

「エムデイ、ディスコカマンガイリ」(さて、ディスコに行こう)

一瞬私は耳を疑った。ここは中国・新疆ウイグル自治区はホタン地区の片田舎。一日中いくつかの調査地を駆けめぐり、さあ宿へ帰ろうかという時のことである。こう言うM君は一〇年来の付き合いで気心も知れている。さては今日の打ち上げの会場を考えていてくれたのかな。しかし、ビールを飲むならもっと静かなところでいいじゃないか、などと思っそう言っつと、M君はかぶりをふって「そうじゃない」と言っつ。ビールなどそこにはないと言うのだ。「まあ、自分で見てごらん。きつと気に入るから」  
—彼はそう言っつてにやりと笑った。

ホタン・オアシスの街道をひた走り小一時間、車はようやく一見して宗教施設と分かる大門(ダルワザ)の前に停車した。おりしもその日は金曜日(ジユマー)で、多くの地元住民が参集し、物売りが屋台を出し、門前まさに市をなす有様だった。

M君に案内されて門内に入ると、そこには敬虔な善男善女が多数。普通モスクは男性だけが入ることが許されているはずだが、と考えて周囲を見渡してやっつと合点がいった。先ほどの大門は金曜モスク(ジャミー)のそれではなく、モスクを含む大きな聖者廟(マザール)コムプレックスの大門だったのだ。広大な敷地内には庭園、モスク、墓地、そして聖者廟本体と修道場(ハーンカー)が配置されており、人々が思い



参拝者でにぎわうホタン地区の某マザールの金曜日



2001年に地区政府によって設置されたマザールの参拝規則。参拝者を許可制にした  
り、マザールでの宗教活動を制限するなど細かな規則が記されているが、撮影時には  
それが徹底されているようには見受けられなかった



参拝客を前に聖者の奇跡譚を披露する「語り」

思いの場集っている。伝統的な東トルキ  
スタンの聖者廟の風景がそこにはあった。  
墓地では親類縁者が故人の墓の前に佇み  
祈りを捧げ、聖者廟の外では男女が各々正  
座して廟のドーム(ガンバズ)にむかって  
祈りを捧げ、そして狭い聖者廟の「本尊」  
では信徒がぎゅうぎゅう詰めになりながら  
熱心に管理人(シャイフ)の話に耳を傾け  
ている。これはこれで見えたえがある。で  
もはたして「デイスコ」と言っているのか  
しらん。そう思ったところ、唐突に修道場  
の方から厳かな歌声が耳に入ってきた。  
修道場では車座になった二〇人ほどの男  
性信徒たちが、体をゆっくり揺らしながら  
朗々と歌を歌っている。それを取り囲むよ  
うにして、さらに多数の男性がそれに見入  
っている。歌の内容はアラビア語の祈祷句  
らしく、聴いた感じはただの歌というより  
も「声明」に近い。聴いていると自然厳か  
な気分になる不思議な旋律である。こうし  
た歌が暫く続き、やがて調子が変わった。  
ひとりの男性が一定の旋律に乗せて軽やか  
に歌い、それに他の信徒が「ウーッ」と声  
を張り上げていわば「合いの手」を入れて  
いくのである。「合いの手」は次第にその  
間隔を狭め、やがて車座の信徒たちは立ち  
上がり、「合いの手」を拍子に旋舞を始め  
る。「デイスコ」が始まったのだ。  
これは凄い、本の挿絵から飛び出して来  
たような典型的なサマー(イスラーム神秘  
主義の儀礼行為。舞踏などによって陶醉



マザールの「本尊」での礼拝風景。「本尊」内部は男性のみが入ることができる



「本尊」の外で祈りを捧げる信徒たち。こちらでは女性もかたまって祈っている



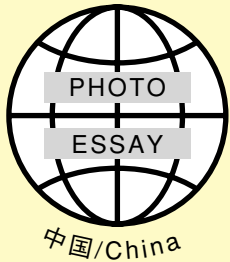
祈りの風景。家族そろって座っているさまは、さながらピクニックのようでもある

神との合一の境地に達することを目的とする)だ! この種の儀礼がかつて行われていたことは知っていたが、まさか自分がその場に立ち会って一部始終を見ることができようとは思わなかった。私はずうっとその光景をビデオカメラに収めながら、「すごい、すごい」と、すっかり興奮していた。

男性たちは「ウーッ!」という声を上げながらぐるぐる回り踊る。それはカシユガルの広場で年に二回踊られるサマーと基本的に同じで、三六〇度の回転を続けるのではなく、一八〇度で反転を繰り返すかたちの旋舞である。ときどき、「エイ、アッラ!」とかけ声を発する人もいる。件の男性は声を張り上げ歌い続け、信徒たちは旋舞にすっかり陶酔しているように見受けられた。この旋舞は一五分ぐらい続き、やがて何か合図でもあったのか信徒たちは踊りをやめて再び車座になって座り、神妙にひとりの歌声に耳を傾けていた。これがホタンの「ディスコ」のすべてであった。

M君はこの聖者廟の近所の出身で、小さいころから毎週このサマーをながめて来たのだという。ここへ私を連れてきたのは、こういう儀礼がいつまで続けられるか分からない、今のうちに見せておいた方がいいという、彼なりの友人への配慮かもしれない。その配慮が私にはとても嬉しく思われた。

おそらく、近年不寛容の度合いを深めて



礼拝が終わってマザールの「本尊」から出てきた信徒たち。心なしか顔が晴れやかである



「ディスコ」風景。車座になって歌う信徒たち



礼拝後、信徒でにぎわう「本尊」の外

いる新疆の宗教政策に鑑みるならば、こうした多数の人が聖者廟に集い踊り興する行為は「非合法活動」と見なされる可能性がある。世界的に有名な「ステージ芸」としてのウイグル舞踊はよろしい、あるいは大都会ウルムチのナイトクラブでスノビッシュユなウイグル人たちが（本当の）ディスコに興ずるのは構わない。おまえたちはただ笑って踊ってればいい、ウイグルは何と言っても「踊る民族」なのだから、と。しかし、古来受け継がれてきた聖者廟を舞台とする儀礼や文化は、当局にとっては好ましくないから「不正常宗教行為」なのである。ホタンの「ディスコ」を目の当たりにして私を感じたのは紛れもなく「伝統」に立脚した骨太なホタン人の文化のエネルギであった。そこにはこずるい恣意もちまちました技巧もなく、ただただまっすぐに神に対する彼らの思いを見取ることができるのである。少なくとも私には、定式化されたいわゆる「ウイグル芸術」よりはこちらの方が心に響くものがある。これはあくまでも好みの問題に過ぎないかもしれないけれども、「芸術」は結構、都会のディスコもご遠慮したい。でも許されるならば、ホタンの「ディスコ」は何度でも行きたいと心から思う。

「アダシユ、ディスコカマンガイリ！」  
 （友よ、ディスコに行こう！）  
 （すがわら じゅん／青山学院大学文学部非常勤講師）